九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

南音『哪吒收妲己』『黄飛虎反五關』について：広東地方に於ける『封神演義』受容の一側面

角田，美和
九州大学大学院博士後期課程

https://doi.org/10.15017/9640

出版情報：中国文学論集．28，pp.119-135，1999-12-25．九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

南音『哪吒收妲己』『黄飛虎反五關』について

――広東地方に於ける『封神演義』受容の一側面――

角田美和

はじめに

殷周の易姓革命を舞台に、仙人と人間の妖術を用いた戦闘を描いた明末の長編小説『封神演義』は、所謂四大小説程ではないとしても、明清時代を通じて二十種類以上の版本を有し、現代に於いても多数の出版社から刊行されて読み継がれている江湖の人気小説である。それ故民間に及ぼした影響は大きく、文学作品も多数生まれている。

筆者は、去る一九九八年七月、広州市の中山大学に於ける留学期間の終わる直前に、北京市にある北京首都図書館を訪れたところ、筆者がこれまで取り組んでいたその『封神演義』に取材した、南音のテキスト『哪吒收妲己』が所蔵されており、幸い閲覧しコピーを得ることができた。さらに一九九九年夏、筆者は幸いにもアジア太平洋センターの平成十一年度若手研究者研究助成金を受け、広州、香港、台湾の図書館を巡り、更なる関連する資料を得た。以上の経緯を経て入手した資料を元に、中国広東地方で行なわれた説唱文学の一つである「南音」の中の『封神演義』について以下考えたい。

さて、ここで南音についてごく簡単に説明をする。南音とは、広東地方の特に珠江三角州一帯で行われた説唱の一つであり、木魚書と呼ばれるものの一種である。北方の鼓詞、江南の弾詞に類し、七言を主体とした歌詞で構成され、弦楽器を伴って演奏される。テキストによっては歌の間に説白が含まれるものもある。波多野太郎氏は「華南民間音樂文學研究―坿載「粵謳[1]」」において

南音『哪吒收妲己』『黄飛虎反五關』について（角田）

南音は文人のものした文學作品で、詩句の表現も藝術的で、メロディも文雅なものである。形式の點から言ふと、南音は木魚より遥かに短く、木魚との相違はないやうである。詞句の字數、押韵のしかた等の點になると、南音と木魚の違いはないやうである。

と説明されている。現在の香港では、椰胡、秦琴、琴等弦楽器と南音板と呼ばれる拍板による伴奏で唱われる。広州市中山大学の黄天驥教授が筆者に語った話に拠れば、革命前の広州の家庭に於ては、無伴奏で唱って楽しんでいたそうである。しかし現代に於いて、芸能としての南音は、専ら粤劇に吸收され[2]、単独で興行されることは大陸では夙に無くなり、香港に於いても、今や普遍的ではなく、一部で行なわれているのみ[3]である。

筆者は先の論文[4]に於いて、清代北京で行なわれた鼓詞『封神演義』を取り上げ、その内容について、原作である小説本と比較検討した。本稿では、『封神演義』に取材した南音の作品を取り上げ、その性格について検討し、併せて鼓詞と比較することで、南音の特徴を考えたい。

一、テキストについて

『封神演義』に基づいた南音作品として、管見の及ぶ所では、今のところ以下の四点が挙げられる。尚、版本所蔵地点の後に挙げた番号は、『木魚書目録』[5]に拠る。

（一）『［新刻］初集紂王』

a．梁培熾「梁氏所藏所見木魚書叙目」　90267　未見

6巻6冊　道光十年（一八三〇）秋鋟　漳江閒情居士訂　莞城　□□□藏版

各巻首「□□堂藏版」

b．マレー大学蔵　90266　未見

三集三冊　道光十年（一八三〇）　莞城　出版社欠

（二）『哪吒收妲己』　（図版A参照）

a．艾伯華『廣東唱本提要』（ドイツ、Bayerische Staatsbibliothek 蔵）　100070　未見
二巻　静観主人　広文堂
b．香港大学馮平山図書館　100071
上下巻二冊、存下巻　静観主人訂　省城五桂堂梓行　版式：十一行×七字×三段
c．木魚歌潮州歌叙録南音　100072　未見
上下巻一〇回　以文堂　「省城丹柱堂梓行」
d．大英図書館所蔵[6]
省城富桂堂梓行　版式：十一行×七字×三段
e．北京首都図書館蔵
学院前元経堂梓行　巻首「省城丹柱堂梓行」　版心：收妲己　版式：十三行×七字×四段

以上の版本の内、bとeが、筆者の直接見ることの出来た版本である。cとeは同じ丹柱堂の刻本という記述があることから、同じ板木と推測される。bとeは板木は全く異なるが、封面のデザインから、bはeを参考にして新たに彫り直したものであるとわかる（**図版A参照**）。両者の封面は全く同じデザインであり、且つ「眞價」という印の彫り等で明らかな様に、五桂堂の方が稚拙だからである。

（三）［新刻全套］黄飛虎反五關［南音］　上下巻二冊　（**図版B参照**）

a．『中國俗曲總目稿』　120095　広州　以文堂
b．傅斯年図書館　120096　広州太平新街分局在第七甫　以文堂
巻首：省城□□堂梓刻　版心：歸周記　版式：十三行×七字×四段
c．中山大学図書館古籍閲覧室　120097　広州光復中路　以文堂
巻首：省城□□堂梓刻　版心：歸周記　版式：十三行×七字×四段
d．莫斯科国立外文図書館　120098　未見
丹柱堂版　封面右上「賈氏墜樓全本」

e．澤田氏旧蔵（現早稲田大学風陵文庫）　120099　存巻下
丹柱堂版　封面「賈氏墜樓全本　黄飛虎反五關歸周記」
巻首：省城丹柱堂梓刻　版心：歸周記　版式：十三行×七字×四段

このうちaの『中國俗曲總目稿』は中央研究院から出版されたものであり、現在bの所属も台湾中央研究院であり、書誌も同じことから、拠った版本は同一である可能性が高い。筆者が直接見たbとcは封面のデザインが異なる他は、全く同じ版本であった。eは写真で確認したところ、丹柱堂のオリジナル本であり、bとcの板木はその書肆が削られた同一のものであろう。

（四）妲己戀紂王　一冊　鉛印　余瑞珊編輯　華興書局
孫中山文献館（広州）蔵

右に挙げたものの内、（一）は年代が道光十年（一八三〇年）と明示されている。これは『木魚書目録』に著録される木魚書のテキストの中において、年代が明示されている最も早い例である。（二）も、aに挙げた『廣東唱本提要』は一八四〇年まで蒐集されたものを收めているということから、道光年間には成立していたと考えてよいだろう。尤も（一）のテキストは残念ながら全く未見であり、（二）もドイツにあるものについては、未見である。今後機会があれば参照したい。（三）は下巻末に「紂王木魚」とある点から、（一）との関連性も窺えるが、不明である。冒頭に「武成王歸周全套」とある外は一切即目が付けられていない。この程度の長さの木魚書には大抵即目が付けられているので、或いは少し古いものであることを示唆するかもしれない。（四）については、鉛印であることと、封面に、「娛樂不忘救國」とあることから、抗日戦争期の発行であると思われる。著者の余瑞珊は、この他にも何本か南音のテキストに名前が見られる。内容は、（三）に較べて語句を少し変えている外は、ほぼ同文であるが、誤字も多い。但し（三）のテキストにない即目を補い、読者の便を図っている。光緒年間から戦後一九七二年に至る迄、精力的に南音のテキストの発行を続けていた五桂堂の、戦後出版されたと思われる南音のテキスト巻末の目録[7]には、（二）と（三）のみ掲載されていることを附記しておく。

『木魚書目録』によると、「丹柱堂」は省城第七甫に所在し、封面に記載があるもの六四例、版本に記載があるもの五〇例が著録されていることから、かなり盛んに出版活動をした書肆のようである。また、「元經堂」はモスクワ国立外文図書館所蔵の一例のみが著録され、その所在は「省城」とのみ記されている。この版本も板木は「丹柱堂」を使用していたとある。北京首都図書館本により、さらに「元經堂」は「学院前」にあったことがわかる。学院は、『廣州府志』（光緒五年刊）の城内地図に拠れば、広州市城内のほぼ中心に位置する。

木魚書は主に清代、民国時代を通じて盛んにテキストが刊行された。戦後の五桂堂の書目には、一番多いもので八十五種が著録されている。木魚書を刊行する書店が多数存在した時代には当然その何倍もの作品が上梓されていたであろうと推測され、或いは『封神演義』に取材した作品も、他に多数あったかもしれない。しかし、今日直接手にとって見ることのできるテキストは、『哪吒收妲己』及び『黄飛虎反五關』とその別版本のみであるので、これを手掛りに、以下、それぞれの内容に踏み込んで検討したい。

二、『哪吒收妲己』の故事とその改編について

まずは『哪吒收妲己』の内容を、小説本と比較検討する。（即目ごとに、対応する内容を持つ小説の回数を〔　〕内に記す。また即目には便宜上、通し番号をふる。）

〈上卷〉

1．御駕回宮＝敗戦の連続を歎く紂王に妲己等三妃が出陣を奏上する。〔九六〕
2．餞別三妃＝紂王が三妃一人一人に酒を勧めて別れの宴を行なう。〔九六〕
3．軍師議敵＝三妃は妖術で兵馬・大蛇等を出し周軍を攻撃する。また故郷より妖人を呼び寄せ宴を張る。姜子牙は応戦の手配をする。〔九六〕
4．偷營敖塞＝妖人は殷の宮廷をも荒らしながら周軍を攻撃する。周軍は哪吒等が術を使って応戦、勝利する。三妃は捕えられ、助命を請う。〔九六〕

5．鮮妖回營＝三妃が弁明している所へ女媧が現われ反論する。〔九七〕

〈下巻〉

6．妖精乞救＝妲己は蘇門の娘であることを拠り所にして、なおも弁明するが、姜子牙は反駁し、死刑を命じる。〔九七〕

7．斬收妲己＝姜子牙自身が法術で妲己を斬る。紂王はそれを知り、歎き悲しむ。〔九七〕周軍の攻撃。紂王と姜子牙、互いに非難する。〔九五〕

8．哭祭妖頭＝紂王は三妃の葬式を執り行い歎き悲しむ。〔九七〕

9．紂王自焚＝姜子牙は紂王を十罪を挙げて弾劾する。〔九五〕紂王は自焚する。〔九七〕

10．周朝一統＝国号は周と改められ、姜子牙は斉王に封じられる。封神や紂王の葬儀も行なわれ、天下万民平和を享受する。〔一〇〇〕

以上、粗筋を大まかに述べたが、故事そのものは『封神演義』の第九六回と第九七回の展開を基本的に忠実になぞっているものの、原作である小説の詩文は一切用いられておらず、また全て七言を中心とする韻文であって、説白も用いられていない。

題名は「哪吒收妲己」となっているが、「偸營敖塞」で妲己を捕えるのは哪吒一人ではなく、又「斬收妲己」に於いて、実際に妲己を斬ったのは太公望姜子牙である。ではなぜこのようなタイトルになったのだろうか。「妖精乞救」に於いて姜子牙は、妲己が狐の妖怪であると告発し、楊戩・哪吒・雷震子に死刑を監督させるが、実は原作に於ては楊戩・韋護・雷震子の組み合わせとなっている。つまり『哪吒收妲己』は、哪吒が登場する機会をわざわざ増多しているのである。このことを考え合わせれば、世に於ける哪吒の認知度が高い為に、このようなタイトルになったと思われる。

さて、以下に主な改編を挙げる。「御駕回宮」に於いては、紂王と妲己達三妃の別れの宴の描写が増えている。ここには妲己、琵琶精、雉鷄精の三妃一人一人と酒を酌み交わして行なう様が仔細に記されているが、原作では妲己との会話のみ記されており描寫の密度が異なる。「軍營議敵」では、原作では三妃自身で戦いに臨むが、ここで

は三妃が妖術で以て戦力を増強する。「哭祭妖頭」は、三妃を殺され悲しみ極まった紂王が、三妃一人一人に焼香し、酒を捧げながら述懐するという場面である。このような場面は、原作にはほとんど描かれていない。以下具体的に例を挙げて示す。

紂王大驚、忙隨左右宦官、急上五鳳樓觀看、果是三后之首。紂王看罷、不覺心酸、淚如雨下、乃作詩一首以弔之、詩曰：

玉碎香消實可憐、嬌容雲鬢盡高懸。奇歌妙舞今何在？覆雨翻雲竟枉然。
鳳枕已無藏玉日、鴛衾難再拂花眠。悠悠此恨情無極、日落滄桑又萬年。

（『封神演義』第九七回）

（譯）（妲己達三妃の訃報を聞いて）紂王は大変驚き、慌てて側近や宦官を連れて、急いで五鳳楼に登って見てみると、やはり三妃の首級であった。紂王は見おわると、思わず心が辛くなり、涙が溢れたので、詩を一首作って、これを弔った。詩にいう：

玉碎け香り消えるは真に憐れむべし、嬌容雲鬢侭く高懸せらる。
奇歌妙舞今何くにか在らん？雨覆い雲翻り竟に枉然たる。
鳳枕已に玉を蔵する日無し、鴛衾再び花眠を払い難し。
悠悠たる此恨情極まること無し、日落ちて滄桑又万年なり。

さて紂王は詩を吟じおえると、自然に溜息が出、悲しみにたえなかった。

忽見宮人凶信報、…紂王回言眞定假、…龍目滔々泪兩淋。大聲叫矣妻妹、可憐三個死得艱辛。妻呀昨日言詞猶在耳、誰曉今朝就喪魂。料想身尸無殯殯、必定沙場五馬分。清明掛帛歸何處、三陰無路去完墳。三嬌共作刀頭鬼、叫吾豈不痛肝心。望妹陰靈歸故群、携吾地府一齊行。夫妻同到黃泉憩、閻王個處把冤伸。紂王哭得如痴醉、吹鬚氣死好刀匂。

（「斬收妲己」）

南音『哪吒收妲己』『黃飛虎反五關』について（角田）

（譯）不意に宮人の凶報を告げるのにあった、…紂王は言葉を返して言った「それはきっと嘘だ」、…目には涙をしとどに浮かべ、大声で妻よと叫んだ。「可愛い三人は死んで辛い目にあった、妻よ昨日の言葉はまだ耳に残っておるのに、誰が今朝魂を失うと分かっていようか。想うに死体は葬られること無く、きっと処刑場で五匹の馬に引き裂かれるのであろう、このようでは清明節に帛を掲げたところで魂は何処へ帰るのやら、三人の魂は墓へ行く路もなく、三美人共に刀頭鬼となるのであろう、私をして心を痛めせしめざるをえない、どうか妻の霊魂よ古巣へ戻り、私と共に冥府へ行ってくれ。夫婦が共に黄泉で憩うのであれば、閻魔大王のところでも想いは伸びるであろう。紂王が慟哭する様は酔っぱらっているかのよう、鼻息は激しかった。

そこで見かねた宦官、宮女の薦めで、三妃の葬式を執り行うことにする。

紂王聽罷臨臺祭、襝手低頭禮拜氷。我係當今商紂王、特來祭奠妹妻魂。香初上　自傷乎、妻呀你亦孤時我亦孤、我有滿肚苦情難盡訴、夫婦折散在中途、嘆我唔能將你顧、至此三妃鮮血染證袍、我身作帝王難保婦、寃要訴前世修唔到、妻呀黄泉路上尋齊夫、三妹恩情猶未息、轉生你爲家主我爲奴。（「哭祭妖頭」）

（譯）紂王は聴き終わると台に向かって祭り、手を袖の中に入れ頭を低くして礼拝した：私は商の紂王である、わざわざ妻の魂を祭るものである。第一番目の香を上げるに悲しいことよ、妻よあなたが独りなら私も亦独りであり、私は胸一杯の苦しい気持ちを抱え訴え尽すことも難しい。夫婦が途中で離れ離れになり、私はあなたを振り向かせることが出来ないのがなげかわしい。ここに三妃の血に染まった証拠の衣服があります。わが身は帝王であれば婦人を保つことは難しいが、想いを訴えたい、前世で修められなかったと、妻よ黄泉路で夫を尋ねることがあって、三妃の恩情がまだ終わっていないのならば、転生後はあなたが主人となり私を奴隷として下さい。

このような調子で、紂王は香を三本焚き、酒を三杯祭って想いを訴えるのである。則ち、妲己達の三妃訃報を聞

いた紂王の描写に於いて、実に執拗に細かく紂王の「歎き」＝「情」が表現されているのである。物語の前半の餞別の宴に於ても、同じように酒を初杯、二杯と掲げながら、情を訴えるという手法を用いており、この様に呼応する描写や、その長さ・深さにより、紂王の「愛情」は、一層際立ち、戦闘場面以上によく描かれていると感じられるのである。以上の様な紂王の描き方は、前回取り上げた鼓詞『封神演義』にはなく、また原作である小説『封神演義』に於ても全く見られないことであり、極めて興味深い。鼓詞『封神演義』に於いて、新たに独自に挿入されていた場面はあくまで戦闘故事であり、特に紂王が追いつめられる最後部は、殆ど原文のダイジェストであるから、力点の置き方が全く異なることは、一見して明らかである。以下鼓詞『封神演義』中の同場面を挙げる。

昏君聽罷一席話、大海崩舟驚一蹕。逼歩慌忙往外走、五鳳樓前閃目觀。睄見了、三妖首級杆上掛、不由一陣好酸：「你在深宮居禁院、怎麼周營命染泉？這就是、上天有意將朕滅。」

（車王府曲本鼓詞『封神演義』第二百十八本）

（譯）馬鹿皇帝は話を聴き終えると、非常に驚いた。慌てて外へ走り、五鳳楼の前で目を凝らした。見れば、三人の妖怪の首級が軒に掲げられており、不意に苦しくなった。「あなたは宮殿奥深くにいたのに、どうして周軍の陣営で命を落とすのだろう？これは、天が私を滅ぼそうとしているということなのだ。」

このように極簡単に述べられ、また、紂王や妲己の呼称も「昏君」「三妖」と、蔑称が用いられ、『哪吒收妲己』の呼称とは異なり、寧ろ小説の記述に近いことが見て取れるであろう。

その他の留意すべき改変について簡単に述べる。「紂王自焚」は、原作では第九七回に相当するが、ここに第九十五回でなされていた、姜子牙が紂王の十罪を挙げて彼を弾劾する場面が、新たに挿入されているが、これは読者への糾弾の説明の為にここに挿入されたと思われる。尚、この間紂王についている近従の名前が原作では「朱昇」なのだが、ここでは何故か「楊栄」に変更されている。

さらに「周朝一統」に於ては封神の外に、原作では全く触れられていない紂王の葬式が、新たに挿入されている。

南音『哪吒收妲己』『黄飛虎反五關』について（角田）

また封神榜のリストは全て省かれている。

『哪吒收妲己』を通して読むと、周側の武将達の記述よりむしろ妲己と紂王の宴会や葬儀等の場面が大幅に増えていることがわかる。この作品を、即目に沿って十分すると、太公望姜子牙を中心とする周の故事は、3．「軍師議敵」10．「周朝一統」の二回分しか描写されず、4．「偸營敖塞」5．「鮮妖回營」6．「妖精乞救」に於ける周軍も、あくまで妲己達との戦いを通して描写してあるのであって、残りの五割の物語の展開の軸となるものが、紂王と三妃にあって周の武将達ではないということは、この作品を、紂王の愛情物語であると、大きく特徴付けているといえるのではないだろうか。またこういった改変は、殷周革命に於ける戦争を軸に、妖怪や仙人が己の術を競って戦い合う内容を持つ『封神演義』の受容について考える時、極めて特異な改変を行なっている作品と位置付けられよう。

このことは、先の論文[4]でとりあげた鼓詞『封神演義』において独自に挿入されているものが戦闘故事であることや、最後の部分では主に小説の語句を使って省略しながら描かれていることと較べて、甚だ対照的である。単純に二百二十本の長編である鼓詞『封神演義』と比較することは軽率であろうが、方向性や趣向という点を考えるならば、このような違いを指摘することも可能であろう。

三、『黄飛虎反五關』の故事とその改編について

次に、『黄飛虎反五關』（以下『反五關』と略す）の故事とその改編について考えたい。黄飛虎とは『封神演義』の主要人物の一人である。元々彼は殷の武成王（大将軍）であるが、妻と妹を紂王によって亡くした後、反乱を興し、殷の五つの関所を破って周に亡命し、周の武成王に封じられて、周の為に活躍するという人物である。この亡命迄についてを描写するのが、この物語である。原作には即目が一切ついていないが、粗筋を追うのに便利なので、同じ内容を持つ『妲己戀紂王』の即目を用いて説明することにする。また、即目ごとに、通し番号を付け、対応する内容を持つ小説の回数を〔　〕内に記し、（　）内には大きな改変を注記した。

〈上巻〉

1. 妖怪設計＝黄飛虎を恨みに思う妲己は彼の妻賈夫人を害そうと企み、紂王に彼女の素晴らしさを訴え、宮中に招き入れようとする。〔三〇〕
2. 假言結拜＝妲己は言葉巧みに賈夫人を摘星楼へ誘導する。〔三〇〕
3. 姑嫂墜樓＝妲己の奸計により摘星楼で紂王に迫られた賈夫人は楼閣より身を投げて自殺する。事の仔細を知った黄飛虎の妹黄妃は、抗議に行き紂王に殺される。〔三〇〕
4. 大亂朝綱＝黄飛虎は反乱を起こし第一関門へ行く。〔三〇〕
5. 妲己戀紂王＝妲己紂王を誘惑して天下泰平であると思わせる。〔無〕
6. 青龍關取＝黄飛虎、第一関門である青龍関（原作：臨潼関、守将は張鳳）の守将陳桐を破る。〔三一〕
7. 假降遊魂＝黄飛虎、第二関門である遊魂関（原作：穿雲関、第三関門の故事）の守将陳梧の陰謀にはまり、危うくなるところを賈夫人の霊魂の助言で事無きを得る。〔三二〕
8. 夢關破難＝第三関門である催夢関（原作：潼関、第二関門の故事）の守将徐方（原作：陳桐）の火龍標により、黄飛虎らは殺される。〔三一〕

〈下巻〉

9. 下山救父＝玉鼎真人の命により黄飛虎の息子の黄天化援助に駆けつけ、父等を、生き返らせ、徐方を破る。〔三二〕
10. 犯水大戰＝第四関氾水関（第五関門）の守将韓栄の子供韓奕・韓昇兄弟の秘密兵器火輪車（原作：万刃車）で黄飛虎は追いつめられるが、一道人の援助で事無きを得る。〔七六〕
11. 誘父投降＝潼関（原作：界牌関、第四関門）の守将は黄飛虎の父黄滾であるが、始め黄飛虎の反亂を非難し戦おうとするが、王明（原作：黄明）の計に陥り、共に亡命することになる。〔三三〕
12. 余化弄術＝中軍の将軍余化（原作：氾水関守将韓栄の部下）、落魂旛（原作：戮魂旛）で黄飛虎一家を捕える〔三三〕。

13．哪吒下山＝太乙真人の命により哪吒が助けに現われ、余化は破れ、黄飛虎一家事無きを得る。〔三四〕
14．成王歸周＝黄飛虎一家は無事に西岐に到着し、亡命する。果たして周は朝歌とは異なり万民が安心して暮せる平和な土地であった〔三四〕。

以上粗筋をざっと逐ってみたが、重要な改変はやはり黄飛虎の五関破りに関する部分であろう。この部分は『三國演義』第二七回「美髯公千里走單騎、漢壽侯五關斬六將」にある、関羽の五関破りの影響を受けて出来たと思われる、一つの大きなエピソードであり、この段だけ独立して戯曲にもなっている、『封神演義』の中でも比較的有名な一段である。この『反五關』に於いては、大まかな展開は原作を踏襲しているが、仔細に見れば、故事を入替えたり関の名前や順番を変えるなど、異なる部分は多い。以下に改変箇所を指摘する。

まずは巻頭に於いて、妲己が賈夫人を誉める修辞を増加しており、この黄飛虎が反乱を起すに至った経緯をより綿密に述べている。次に黄飛虎等が朝歌を出るときに、殷の大将軍である聞大師や、その他の関門の守将等に取囲まれて危機に陥るところを、清虚道徳真君の助けで難を逃れるというエピソードが全て除かれた構成となっている。さらに、反省をする紂王に、妲己が紂王は正しいと口先三寸で丸め込むという、妲己の狡猾さを強調するエピソードが増加されている。これらの変更は物語を聞く上で、より分かりやすくする為の細かな改変といえよう。

この作品に於いて最も改変著しいエピソードは、物語の主軸となる黄飛虎の五関破りである。まず第一関門は全て異なる。そこの守将は黄飛虎に賛同する自分の部下によって暗殺されるのだが、ここでは黄飛虎自身の手で勝負をつけ、黄飛虎等の強さを強調する描写となっている。

関名の変更について、ここで纏めると次のようになる。

『封神演義』＝臨潼関→潼関→穿雲関→界牌関→汜水関
『反五關』＝青龍関→遊魂関→催夢関→汜水関→潼関

『封神演義』に於ける関門突破というモチーフは、前半に於ては黄飛虎によって、後半に於ては周軍によってと二度用いられている。そして前半と後半では関門は異同がある。『反五關』の変更については、この原作『封神演

義』後半部分における、周軍が朝歌に攻め上る時の関門名と関係がありそうである。それを以下に挙げる。

『封神演義』後半＝青龍関・佳夢関・汜水関→界牌関→穿雲関→潼関→臨潼関→遊魂関

『反五關』の催夢関は佳夢関の誤記と思われるが、『封神演義』では青龍関とともに黄飛虎に関わって登場する。遊魂関も第九三回で周軍に奪取される関門である。いずれも突破される描写は原作後半部分に集中している。更に、第三関門催夢関の守将の変更については、南音の作者の苦心が窺える。第一関門青龍関に、原作では第二関門の守将である陳桐を持ってきて、次の関門陳桐の弟の陳梧に繋げるという工夫をしたが為に、第三関門の守将を新たに用意せばならず、ここに「徐方」という人物が登場する必要が生じたと考えられる。原作に於いて、「徐芳」は第七三、七四回に登場する穿雲関の守将である。ただし、ここでは名前を持ってきているだけなので、武器や戦い方は全く異なり、原作の陳桐のそれと同じことになっている。次の第四関の韓栄親子の戦いに於ての変更は著しい。原作に於ては、韓栄はこの場面ではあまり活躍せず、周軍が攻め上って来る時に戦う。第四関のエピソードは、原作第七六回のものを持ってきたことになり、そうすることで、韓栄との戦いを完璧に終らせてるのである。つまり、描写範囲にない話も寄せ集めることで、物語に完結性をもたらしている、とみることができよう。

以上、改変の実態を追ってみると、そこには一つの物語で纏める為の、合理的な変更と見做せる箇所が多々みられる。しかし、この改変は読者に便宜を図る為のものであって、ここに新しい『封神演義』世界の創造を見て取ることは難しい。原作の延長線上にあって、より分かりやすく纏めた作品と言えよう。

ところで、『哪吒收妲己』との関連について見れば、全く別々に成立した作品と見做して構わないであろう。何故ならば、『哪吒收妲己』には、

西岐姜尚今爲亂、統領諸侯各到臨。打破頭關殘汜水、韓榮父子共歸明。　（「御駕回營」）

（譯）西岐の太公望姜子牙は今や乱をおこし、諸侯を統括して各々臨むに到った。第一関門は打破して汜水関を残す、韓栄父子は共にもう死んでしまった。

とあり、韓栄親子は、周軍の攻撃によって戦死しているのは原作の通りであり、『反五關』の中での黄飛虎と韓栄との戦闘場面の挿入は、全く反映されていないからである。更には、即目の有る無しといった形式の点、物語の改変の趣向の違いなどもこの見方を補強するであろう。

おわりに

『哪吒收妲己』と『黄飛虎反五關』を読み比べることで、南音作品は、『封神演義』の語句をそのまま用いるのではなく、其のほとんどを七言で語り、且つ内容も一本一本の中で完結するように、原作をアレンジしながら書いているということが明確になったと思う。これは鼓詞『封神演義』の前半が、独自に挿入した戦闘故事の外は、前半後半を通してほとんど原作に忠実に、時には小説の詩文をそのまま用いて語っていることと対照的である。鼓詞二百二十本と、この上下巻の分量しかない南音を比べるのは、そもそも無理なのかもしれないが、一本の物語の完結性ということを考えるならば、南音の作品の方が、より完成度の高いものと言ってよいだろう。全ての改編が物語の構成に無理なく機能している様は、鼓詞のテキストには見られないからである。鼓詞の前半と後半では矛盾が生じていることは先の論文で触れた。この事はテキストの成立過程が違う事を示唆するかもしれない。鼓詞のテキストは講釈師の口吻をそのまま写すかの様な、地の部分が所々に見られた。まさに目の前で講釈師が語っているのを聴いているかのようなリアルなライブ感覚が味わえるのである。また前半と後半で作り手が異なる形跡も見られ、複数の手により作られた物語である可能性も高い。これに対して、南音は完結している歌詞であり、講釈師の息遣いは殆ど感じられない。この事から現存する南音のテキストは、一人の文人が辞句を練り、書き下ろした歌のテキストであると位置付けられはしないだろうか。その際に著者の嗜好するものや、読者に便宜を図るためのものが、右で見てきたような改編に繋がるのではないかと、筆者には思われるのである。

註

（1）「華南民間音樂文學研究――坿載「粵謳」――」『横濱市立大學紀要　人文學第八篇中國文學』第八号　1977

（2）梁培熾氏『南音與粵謳之研究』（舊金山州立大學民族學院亜美研究學系出版　1988）に拠れば、民国時期に粵劇の改革が行われ、地方色が強まった際、「南音二流」「流水南音」等、叙情曲調として粵劇の音楽に取り入れられたという。

（3）香港のテレビ番組から南音が消えたのは一九七〇年であり、そのテキストの出版に精力的だった五桂堂は一九七二年に廃業した。現在香港で南音のテキストを発行しているのは陳湘記書局であるが、作品数は二五種と大幅に減少している。

（4）拙稿「清蒙古車王府曲本鼓詞『封神演義』について――封神故事の演變に関する一考察」『九州中國學会報』第三六号　1998

（5）稲葉明子・金文京・渡辺浩司共編『木魚書目録』好文出版　1995

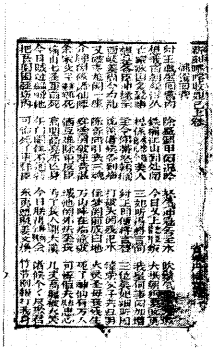
（6）笠井直美「大英図書館所蔵所見通俗文学書抄――木魚書を中心に――」『中国古典小説研究』第二号　1996

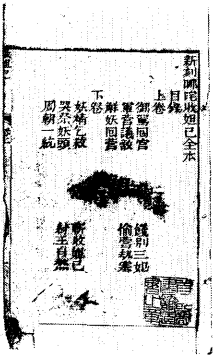
（7）香港大学亜州研究中心所蔵『新刻羅卜挑經救母全本』巻末目録等参照。五桂堂の目録はテキストにより、総数が異なるので、『收妲己』と『反五關』は、八十種以上掲載されている目録に見られ、六十種程度の目録には掲載されていない。

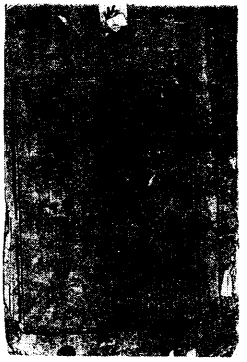
※この小文は、アジア太平洋センター平成十一年度若手研究者研究助成金による成果の一部である。また、資料閲覧にあたり、中山大学図書館、孫中山文献館、台湾中央研究院傅斯年図書館、早稲田大学図書館に多大にお世話になった。ここに記して謝意を表わしたい。

（図版A）

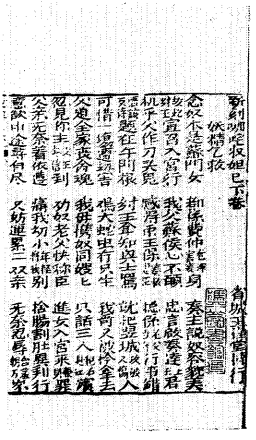
（二）e．北京首都図書館蔵本







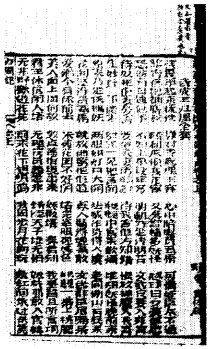
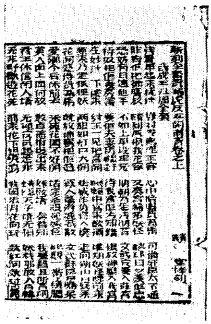
（二）b．香港大学馮平山図書館蔵本



（図版B）

（三）e．澤田氏旧蔵本
（現早稲田大学風陵文庫蔵）

（三）b．傅斯年図書館蔵本



（三）c．中山大学図書館蔵本